

# AFTERNOON TEA

横浜市立大学大学院医学研究科循環制御医学  
医学部生理学第一講座

南沢 享

## 野球—分析と統合のスポーツ

東邦大学医学部薬理学教室の赤羽悟美先生からバトンを受けました。

横浜市立大学医学部福浦キャンパスは、横浜というものの、横浜市の最南端に位置しており、みなさんが学会等で訪れることが多いみなとみらい地区からは、電車で約50分もかかります。アミューズメントパーク横浜八景島シーパラダイスが目の前にあるため、教室の窓からはシーパラダイスで打ち上げられる花火を一望にみることができ、日本で最も花火がよく見える生理学教室と自負しています。

現在私は心筋筋小胞体におけるカルシウム再吸収に関する分子機序の解明を研究の中心テーマとし、遺伝子改変マウスを使って、主に分析的な仕事を行っています。しかしいずれは一連の研究を統合し、国立循環器病センターの菅先生らが提唱されているようなフィジオーム的な仕事に発展させ、さらには生命現象全般を統合できるようなBiome（バイオーム、造語です。従来、「生息環境」を意味して使われているようですが、）を目指したいと夢をみえています。

さて、いざ引き受けて、過去のafternoon teaを改めて読み直してみると、みなさんそれぞれ味わいあることや、役立つことを書かれていて、メ切を直前に尻込みしている状態です。特に本年6月号・九州工業大学花沢先生がご紹介してくれた「ブログ」なるもの、大変役立ちそうで早速始めてみたいと思いました。PCは、家電並の使い方しかできない私にとって、「ブログ」とは初めて目にした言葉でした。メ切があと1ヶ月遅ければ、「ブログ事始め」といった内容で原稿が書けたのに、と悔やんでおります。

そこで何を書いても良いという企画の先生方の

言葉に甘えさせていただき、研究以外に好きな「野球」のことを書きたいと思います。物心ついた時から野球をやっていました。今と違い、子供のスポーツと言えば野球がスタンダードでしたから、運動好きの子供なら、当たり前のことかもしれませんが、数度病気を患っても、大学6年を終わるまで続けたのは、やはりそれなりの理由があると思っています。ちなみに私が所属した弘前大学医学部準硬式野球部は、現在は東医体で連続優勝をする強豪チームとなっていますが、当時は私が2年の時に初優勝をしたものの、なかなか勝ちに恵まれないチームでした。大学を卒業してからはなかなか野球を楽しむ余裕がありませんでしたが、留学でSan Diegoに行ったことから、大リーグ観戦を楽しむ機会に恵まれました。地元であることからSan Diego Padresを応援し、1998年にはworld seriesも生で観戦することが出来ました。野球好きのラボのメンバーとも話がはずみ、帰国の時は総勢30名以上のメンバーでフェアウェル観戦をしました。そのときイニングの合間のバックスクリーンに、「Good luck, Susumu」と表示された感激は今もよく覚えています。

私は野球ほど、特に攻撃面で平等な団体球技は、他にないのではないかと考えています。それは多分に、野球の特殊性として、攻守がはっきり分かれていることに起因しています。他の球技のように一瞬にして、攻守が交代することはあり得ません。そこで攻撃時には、たとえ1割バッターであろうと、試合に出場している限りは、必ず順番には打席がまわってきて、勝負することができます。「強打者」が下位のバッターを追い越して、もう一度打席に立つ、ということはあり得ません。自分の番がいずれやってくることに關しては、100%安心していられます（代打はあり得ます

が)。逆に言えば、必ず打順が回ってくるために、大きな責任感をもつことになります。もちろん、強打者はより得点の稼げる打順に選抜されることはあるし、足の速いものはトップバッターとして、ほかの選手より打数に恵まれることがあります。それととも選手の能力によって、一定枠での優位性を与えている、という点では、考えようによっては、より平等といえるのかもしれませんが。ほぼ同様の機会を与えられ、その結果生じる打撃成績の優劣は明白であり、選手は能力評価に対して言い訳をすることが困難です。翻ってサッカーやバスケットボールなどの競技では、能力の劣る選手は、下手をするとボールに触らせてもらうことさえ、できないかもしれません。また、ポジションによる役割分担が異なる上に攻守が一体となっているために、異なるポジションの選手間での評価を難しくしています。このように書き進めて、既に気付かれた方もいると思いますが、昨今の競争原理の導入や競争的研究資金の獲得、といった流れは、私からみると反野球的に感じています。日本での野球人気の衰退、サッカーの隆盛は、かなり極端な競争原理の導入と符号しているのかも

しれません。その流れのなかで、教員評価、も大いに議論されていますが、ポジションの違いをどのように的確に評価に組み込んでゆくのでしょうか？私の野球的頭では、打率（研究）2割5分以上、守備率（教育）8割以上、防御率（臨床）3点以下、などのようなスタンダードがないと、とても理解不能です。

最後に野球に惹かれる点をさらに考えてみました。投手vs打者の関係から生じる結果（成果）は、きわめて分析的であり、個に帰結します。イチローばかりでなく、打撃を極めようとする打者の姿勢には、求道師の雰囲気漂います。しかし最終目標はあくまでチームの勝利であり、個と全体のバランスが実に絶妙であると思います。この点が、分析と統合の生理学をともに大切にしたいと思う自分のテイストにあうのかと思っています。あまりよい落ちにはなりませんでしたが、この辺で次の先生にバトンをまわしたいと思います。この雑文に最後まで付き合ってくださいました方がいましたら、どうもありがとうございます。生理学会総会で野球大会があってもいいと思いませんか？

京都府立医大 第二生理

井之川 仁

理化学研究所の松元健二先生からバトンを受けました。松元先生とは重点領域研究が薬科で開いた夏のワークショップ以来のお付き合いです。当時大学院生であった我々は朝夕のワークショップと息抜きの観光そして深夜まで続くディスカッションと寝食を共にした夏の高原の日々が懐かしく思い出されます。時は流れて、お互い人の子の親になりましたが、学会でお会いすると変わらぬお姿に昔の気分に戻ります。

私は京都府立医科大学・外山敬介教授のもと視覚野の研究を初めにこの世界に飛び込み、現在は木村實教授のもと報酬・意思決定・行動発現をキーワードにサルを用いて研究しております。

さて、アフタヌーンティーはどんな話題でも気

ままに書いてよろしいですということなのでこれより先は気ままに思いつくまま、雑文で埋めさせていただきますと思います。

六月に入り近所の田んぼ（筆者は京都市内在住ですが近所には少なからず水田が残っていたりします）の田植えも済んで水の張られた田んぼからの照り返しが眩しい季節になりました。先日子供たちを幼稚園に送る途中、子供たちが田んぼの中で何かを見つけました。「これなあに？」と指差された先には体長1～2センチの緑色でなにやら足の多い虫が大量に群れを成している。これは？と思い近づいてよく見ると、やはりシーモンキーではありませんか。こちらの方が大きく色も違うが確かにコイツはシーモンキーだ。ご存知の方も

多いと思いますが、昔、学研の「科学」という子供向けの雑誌の付録にこのシーモンキーを飼育するセットがあり、箱の絵には上半身がおサルのような下半身は人魚のようなイラストが描かれており、こんな奇妙な生き物が生まれてくるのかと、ものすごどきどきしながら飼育したのですが、生まれてきたのは小さなエビに良く似た虫だったのでかなりがっかりした覚えがあります。後日ネットで検索すると、見つけたのは甲殻綱無甲目ホウネンエビ科に属するホウネンエビで体長20mmの細長い円筒形で甲を持たず、11対の脚がある。初夏の頃、水温の高い水田などに出現する。「大発生する年は豊年になる」という言い伝えがあるとのこと。初めて見る未知の生き物に目を丸くしている子供たちに、「これはシーモンキーっていうんだよ」「モンキー？おさるさん？」「いやいや、モンキーっていうけどおさるさんじゃないんだよ。えびさんのなかまなんだよ」「エビ！」と二人は一瞬顔を輝かせほぼ同時に「食べられるの？」ガクッときました。いきなり食べられるのか？と聞かれた日には、その時、小学生の頃の自分を思い出していました。当時、4年生の私は食糧危機が訪れるかもしれないというなにかの記事を読んで妙に危機感を募らせ、「飢餓食クラブ」なるものを作りました。現代では普通は食べないような動植物を食べられるようになり、そして将来訪れるかもしれない飢餓に備えるという趣旨のクラブでした。毎週土曜の午後に近くの山、川、沢や池を散策しては食べられそうなものを見つけ調理するのです。定番は蜂の子料理、蜂の巣を見つけては中の蜂の子を取り出して集めます。もちろん親蜂がいないときを見計らうのですが、い

るときは爆竹や煙で撃退したりして、スリリングで人気がありました。ただし、初めて調理した時には悲惨な目に会いました。単純に炒めて食べたら良いだろうと、熱したフライパンにサラダ油を注ぎ、その中にどぼっと蜂の子を入れたのです。その後は大変。熱しすぎたせいか、フライパンに入れたとたんパンパンパン、と次から次へと蜂の子が破裂したのです。台所中蜂の子の破裂したカスと油が飛び散り後片づけの大変だったこと。また、蟻だつて食べられるよと言っては、歩いている蟻をつまんで食べる蟻の踊り食いもしました。率先してアリクイのように蟻を食べているうちに蟻に舌を噛まれて痛い思いもしました。今でも蟻を見ると舌の痛みと蟻の酸っぱい味が蘇ってきます。なんてことばかりやっていた少年時代ですが、こんな体験が将来生理学の世界へと足を踏み込む原体験だったのかもしれませんが。その素養がわが子にも遺伝しているのか？と少し嬉しくもあり、またこんなところが似なくても…と複雑な気持ちです。

昨今は、基礎研究であれ大なり小なりの社会への還元が求められ、また生理学に興味を持つ人が少なくなる近年、青田刈りには若すぎますが、幼稚園では早すぎるでしょうから、小学生を対象に生理学の世界を知ってもらい興味を持ってもらうためのアトラクティブなイベントを大会期間中に設けるというのどうでしょうか？この年代の子供たちの多くは生命現象に対して純粋に興味を持ち始めるときだと思うのです。そこで強烈な刷り込みをしてあげれば将来生理学を志す若者がホウネンエビの様に大量に増えるかも…なんてことを幼稚園までの道すがら考えてみました。

浜松医科大学・光量子医学研究センター

山本 清二

## 縦縞を見ると…

大阪社会医療センター病院・整形外科の中村夫左央先生からバトンを受け取りました。私は浜松医科大学光量子医学研究センターで光を使った

イメージングによる研究を行っています。脳神経外科医である私は、臨床から発した「なぜ神経細胞は虚血でいとも簡単に死ぬのか」という疑問を解き明かすために基礎研究の領域に足を突っ込

み、現在に至っています。

さて、昨今の中国の反日デモ、反日教育に端を発し、教育の重要性を痛感するこの頃です。歴史教育をしっかりと叩き込まれた中国の若者に比べ、日本は平和で歴史教育も不十分。「中国のデモは“半日デモ”で1日中やらない」と思っていた人がいると聞いて、不十分というよりそれ以前の問題という気さえします。ここで教育の問題を議論するつもりはありません。ましてafternoonに飲むteaの味が損なわれるような話は控えるべきです。しかし、それしかないという教育というか“すりこみ”を受けたら人はどうなるか、それを実感したことがありますので、お茶うけに少しお話ししましょう。

一昨年、2003年9月のアメリカ・ミシシッピ州・ジャクソン。メディカルセンターにいる友人の家に共同研究のためホームステイしていた時のこと。夜テレビを観ていると、CNNニュースが日本からの映像を伝えています。画面の中では縦縞のユニホームがダイヤモンドを走り回っているではありませんか！これはヤンキースではない！日本の縦縞だ！その途端、胸に熱いものが込み上げ、「今世紀中はもう見ることはできないかもしれないのに、日本を離れるのか」と家族に言われながら日本を出発した日を思い出し、「あっ」と言ったまましばらくテレビの画面に釘付け。CNN曰く、「1986年以来Tokyo Giantsに負け続

け苦杯をなめてきたHanshin Tigersファンはお祭り騒ぎ」と。「なに！？Tokyo Giantsに負け続けただと？それは間違いだ！」真実を伝えないCNNに抗議したくなり、「Hanshin Tigers（ハンシンタイガーズ）」といういかにもネイティブらしい発音も耳に障り、「デトロイトタイガーズであっても、阪神はタイガーズじゃなくてタイガースです！」と心の中で叫び、凍りついていたのでしょう。自分のからだに力が入っていたのは今でも覚えています。よっぽど難しい顔をしていたかもしれません。アメリカ人の友人が心配そうに「どうした？」と聞いてきたくらいですから。その夜、家族から送られてきた「祝優勝」のメールを何度も読み返し、いつまでも寝付けない自分がいたのを覚えています。ただでさえめったに観ることができない阪神の優勝を、アメリカのテレビで観た！これは興奮物です。

しかし恐ろしいものです。縦縞を見た途端に自分がその世界に引き込まれたのは、2週間あまり日本から離れ日本語を全く話していない状況を差し引いても、そう不自然ではありません。問題はあの巨人の話が出てきて、負け続けて…ということばが頭に響いてからです。これはおそらく長年の“すりこみ”によるものでしょう。中国の若者が日本ということばを聴いてある種の反応をするのも分かるような気もするのです。